

平成24年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

足立休哲画像

この掛け軸は昭和58年に足立休哲の遠縁にあたるらしいという町田市在住の足立富之助さんから郷土博物館に寄贈されたものです。

足立さんも足立さんのお父さんも足立休哲のものとは知らず代々家宝として伝えられていたと云います。博物館に持参した時には、紙がボロボロで、軸の天地にはカビやシミができていて良い状態ではありませんでしたが、現在ではきれいに修復されています。

この画像は縦65cm、横29cmで、着物の上に黒い羽織をきた休哲が、開きかけた薬箱の横に座り膝の上に両手を置き、前には開いた本が置かれています。やさしい面差しで何か調べ物をしているようにも見えます。絵の天の部分の文面には「休哲が阿州（阿波国）徳島の生まれで、92歳までは元気でしたが宝暦壬申（1752）10月25日に93歳で亡くなりました。休哲は森下の字山根（現青梅市森下町443辺り）で医業をしておりましたが、その功績が世間に知れ渡り、病の人たちが墓所に病氣治癒の祈願（目の病氣の人は絵馬を耳の悪い人は穴の開いた石を奉納）に訪れるようになりました。甲戌が宝暦4年（1754）とすれば、3回忌に追善供養のため、この肖像画の軸を造り感謝の意を表わしました。」と書かれています。又、この書は休哲の医業を後世に伝えるため丙午秋とあるので、後の天明6年（1786）か弘化3年（1846）に蜜門僧 融慧によって書かれたものであることが分かります。



足立休哲画像（郷土博物館所蔵）

足立休哲は生涯結婚もせず、清貧で人情に篤い人であったそうです。『青梅郷土誌』

によると「或る時北島某が病んで危篤に陥り治療を休哲先生に乞うた。休哲先生はたちまち之を治した。北島某は謝礼として金5両を差し出したが、休哲先生は怒ってそれを受けないで50両を請求した。北島某はやむなく50両を出した。先生は自若として之を受け取ると、ただちに病苦に悩む貧しい人々に之を施してしまい身につける所は一物もなかった。これは、当時の美談として伝えられた。」とあります。

死後建てられた小さな祠は「休哲さま」と呼ばれ今でも訪れる人がいます。以前は月命日には必ず近所の人たち数人でお墓の掃除をし、お茶飲みをしていたが今では皆高齢になったり、具合が悪くなったりしてなかなかお掃除もできないそうですが、命日の10月25日にはお参りするそうです。

(文責 儘田 小夜子)



足立休哲が祀られた祠